114　識名橋の幽霊マジムン

一日橋の上、そこに識名の幽霊マジムン（化物）ちゅうのがおったわけさ。あれ、いわゆる一日橋。島尻、南部方面からね、元は王朝時代は首里にしかないわけさ。首里に何かを、貢ぎ物を持って行く場合は、その識名の坂を通って行かんといかないわけ。道がないから。どうしてもそこを通らないといけないもんだが、そこにときたま幽霊が出るというふうなことを聞いておりましてね。夜、怖がっておったらしいよ、全般的に。そん時ゃ琉球王朝時代ですからね。それで、武士連中もたくさんおったんだが、武士でさえこの幽霊マジムンは怖がってしまってね、そこを避けよったらしいよ。

　ある侍が、

「まさかこの世の中に幽霊ちゅうのがおるか、珍しいなあ。私、見てこよう」ちゅって、意気込んで行ったらしいよ。そうした場合は、もうすぐ、早速立っておるらしいね。来い来いちゅうて言わんばかりに、こうして。何いってるか、この世の中に幽霊ちゅうのがおるか。刀で大上段に切ってね、帰ったらしいよ。それで、帰ったらこれが、切って帰ったらね、血を浴びたらしいよね。

「ああ、もう大変だ。これ、人を切ったに違いない」と。

　帰って、家に帰って翌日、見たらね、ソテツを切ったて。そのソテツがね、風が来るでしょう。それを気の弱い連中は、幽霊が出てわしに呼び掛けしておるというようなこと、間違っておったね。しかし、それが何と言いますかな、切って、後から血が出てしまってね。これ、人間の血痕が残ったとな。

字伊原　外間樽助